

## 港の先駆者



日本トランスシティ株式会社  
代表取締役社長 社長執行役員 安藤 仁

当社の最大の事業拠点である四日市港は、江戸時代から明治にかけて当地で回漕問屋を営んでいた稲葉三右衛門(1837年～1914年)による築港事業が礎となり近代港湾への道筋が開かれました。

古くから四日市は、東西を結ぶ海陸交通の要衝であり、地形に恵まれた天然の良港を有していたことから数多くの船が出入りしていましたが、安政元年(1854年)に発生した大地震により甚大な被害にみまわれ、港湾への土砂流入で船舶往来に大きく支障をきたす状況に陥っていました。

これを目の当たりにした三右衛門は、「四日市の生命は港にある」と強い危機感を持ち、地域経済の将来のためこの事業に着手したのです。

明治6年(1873年)に着工したこの巨大事業に要した期間は12年、民間人としては想像を絶する巨額の費用に、三右衛門は莫大な私財を投入しました。

工事は困難を極め、資金難による中断も余儀なくされましたが、三右衛門は「自らが十万金を投じるのは、将来四日市に百万金をもたらさんがため、ましてや工事費用は人々の収入にもなる」と屈することなくその意志を貫き、この驚嘆に値する偉業を成し遂げました。

三右衛門の没後100年以上経過しましたが、この間、四日市港は地域経済に欠かせない様々な産業の発展に貢献してきました。いま中部圏における国際ゲートウェイのひとつとなった港の姿を三右衛門が見ることができたら、その思いはいかばかりかと想像します。そして、築港事業に生涯をかけた三右衛門の生き方に、港の先駆者としての誇りと気概を強く感じるのです。

このような先人の偉業に思いを馳せると、「地域とともに生き、広く社会の発展に貢献する」という当社の企業理念に対する責任に身が引き締まる思いがします。

郷土の偉人の意志を受け継ぎ、これからも中部のものづくり産業の成長と発展を物流面で支えるとともに、安心、安全な社会の基盤である物流インフラをさらに強靱にするための力になれるよう事業に取り組んでまいります。